

## 中原悌二郎の

### 写真コレクション(一)

武井 敏

はじめに

中原悌二郎(一八八八—一九二一年)が収集した写真コレクションが当館に保管されている。このコレクションは一九八八年に遺族から寄贈されたものであるが、通常の展示はなく、中原の企画展の際に数点展示されるに過ぎず、あまり活用されていないのが実情である<sup>1)</sup>。二〇二一年、中原の没後百年を機に写真コレクションの全容を公開することとした。それは、今後の中原芸術の理解の一助となることを願ってのことである。ただコレクション写真は一三三点を数えるため、数回にわたって紹介することとする。ちなみにその内訳は以下のように伝わっている。

ロダンの彫刻およびその記述	十一
ギリシア彫刻	一
日本仏像・肖像彫刻	六二
日本古代寺院建築	十四
伎楽面・舞楽面	八
日本古代仏教造形物	五
東洋古代仏教造形物	二
西洋絵画	十三
日本古代仏教絵画	十一
水墨画	一
頂相	二

近世工芸

墨書

二

一

今回は「ロダンの彫刻およびその記述」および「伎楽面・舞楽面」について紹介する。これら二種類の写真を手始めに紹介するのは以下の理由による。ロダン作品の写真を取りあげるのは、中原に関する文字資料のなかでロダンに関する記述が多いため、多くのファンや研究者が最も目にした写真と思われるからである。「伎楽面・舞楽面」を取りあげるのには《若きカフカス人》の理解に関わると考えられるためである。

#### 中原悌二郎にとつてのロダン

親友の中村彝は中原の芸術的直観について「知識慾の旺盛な洋画の学生にとつてはその飢餓を充たすべき何ものもない、貧弱際まる時代であったが、中原は斯る中であつて、よく自分の進むべき方向を知り、異常なる直覚と本能とによつて、多くのガラクタの中から真の天才を発見し、その中から尊いものを汲み取る事を怠らなかつた<sup>2)</sup>」と述べる(引用は適宜旧漢字をあらためた、以下同様)。そうした直観によつて収集したのは、ミレー、ドラクロア、ミケランジェロ、ドナテロ、雪舟、牧谿等の写真であつた。これらは浅草や本郷の夜店から安く掘り出したもので、彼の三畳の小室の壁に貼り付けられていた<sup>3)</sup>。そしてついに中原はその後の道を決定づけるロダンの《考える人》の写真版と出会うのである。その時の感激から中原が口にした言葉は中村によつて次のように書き留められている。

これはどうだ!? 聞いた事もない彫刻家だが、恰るでミケランジェロのやうに擽猛だ。この線を見る。この山のやうな線を見る。これが分らん様な奴は死んで了ふが、のだ。僕は昨晚一晚木炭で模写

して見たが、いくら描いても描いても大きく許りなつて木炭紙を二枚つないでも入りきれないのだ。この山の様な線は殆ど無限に長いやうに感じられて仕方がない<sup>4</sup>。

《考える人》に出会えた中原の感情の高まりがひしひしと伝わってくる。それとともに、収集するばかりではなく、時にはそれを模写して研鑽を積んだことがわかる。

このようにしてロダン芸術と邂逅した中原はその後ロダンへ傾倒していく。それは、明治四二年七月一六日の日記内の記述「ロダン彫刻の写真に接した時に（中略）非常なる喜びと希望とを感じた。（中略）今迄の煩悶がまるで一掃されたやうであつた<sup>5</sup>」、明治四五年に戸張孤雁とともに赤坂三会堂で開かれた第四回白樺美術展での感想「是が死ぬまでにしたつた一目でもと願つたロダンの彫刻。」、大正五年の自身が彫刻家になった動機と制作態度をつづつた文章中の「ロダンの芸術は自然そのもの、如く真実である<sup>7</sup>」などに如実に現れている。さらに「今でも私は暇ある毎に、ロダンの製作の写真から手を放したことがありません<sup>8</sup>」とも述べる。こうしたロダンへの情熱を推し量るには残念ながらも少ない枚数であるが、以下に現在確認できた十点の写真を紹介する。

### 《若きカフカス人》

中原の後期の作品について、しばしば指摘されることだが、その粘土を止めつけるようなタッチもあつて、彼自身のロダンへの意識は別として、少なくとも作風はロダンから離れているように感じられる。このことに関わつて、越前俊也氏は「中原の作品は、どうしてもロダニストの系譜として語られることが多い。しかし、その晩年の仏像への傾斜ぶり、

とりわけ、彼が無自覚のうちに収集していた小川一真の写真版を検討することにより、「若きカフカス人」「平柳田中像」などの理解は見直される必要がある<sup>9</sup>。」と述べる。

ここで《若きカフカス人》について振り返つておこう。

この作品は、一九一九年（大正八年）の作。晩春、ハルピンにいた鶴田吾郎から共通の友人である高野正哉あてに、知人のロシア人ニンツァーが東京に行くからよろしく頼むとの連絡があり、高野が相談に来た。中原はそこでロシア語のわかる相馬黒光に託すことにした。ニンツァーが中村屋に仮寓するようになってから数日後、相馬夫妻がニンツァーを連れて中原の家を訪ねてきた。以後ニンツァーはたびたび中原宅を訪れるようになり、八月、ニンツァーをモデルに中村舞のアトリエで制作した。一週間ぐらい経つとニンツァーがモデルになるのを嫌がり出し、困つた中原が妻・信に相談すると、晩餐会を中村のアトリエで開催することになった。中原夫妻がアトリエに着くと出てきたニンツァーは信の手を引つ張つて、作りかけの彫刻の前へ連れていき「中原は鬼を作ります。これ見て下さい。プーア・ニンツァアを。」と、しよげて見せ、「私、これを毀してもいいかしら。」と言つたという<sup>10</sup>。結局制作はその後一週間で打ち切りとなり、ニンツァーが壊すと言つてきかないため、中原は自宅で石膏取りをし、さらに急いで鑄造を頼んだという逸話が残っている。

モデルのニンツァーを中村舞のアトリエで撮影した写真があるが、背景の壁には忿怒の形相を示す仏像を石膏にしたものが二点掛けられている。この石膏像について、千田敬一氏は壁の石膏像は「新薬師寺の十二神将の忿怒」であり「若きカフカス人」の表情と何か不思議な一致を感じさせる<sup>11</sup>と述べている<sup>12</sup>。《若きカフカス人》に忿怒像との類縁性を認める見解は、中原の友人にもある。中村舞は「近代露西亜特有の

虚無的色彩を帯びた、驕慢で熱烈な野獸的性格が遺憾なく表現され、手法の明浄、様式の至純に於て、一見古代の十二神将の像などを思はせる(強調筆者)<sup>12</sup>と、平櫛田中は「僕は密教芸術、殊に忿怒部の諸尊に見る、彼の偉大なる強猛性と、破壊性と、神秘性とを此像に見るのである(強調筆者)<sup>13</sup>」との言葉を残しているのである。

以上、《若きカフカス人》については「仏像」(越前氏)を別にすれば、多くの者が「十二神将」(千田氏、中村)、「忿怒部の諸尊」(平櫛)、さらに「鬼」(ニンツァー)といったように、激しい表情と結びつけ、少なくとも人間を超えた存在と結び付けている点では共通していることが興味深い。中原の写真コレクションの「日本仏像・肖像彫刻」のなかには、たとえば東大寺戒壇院の持国天、広目天、增長天、法華堂の執金剛神像といった忿怒像がいくつか含まれていることもあり、次号で「日本仏像・肖像彫刻」を紹介した後に《若きカフカス人》についてはあらためて感じる部分があると思うが、激しい表情をとる点と《若きカフカス人》の特徴的な面のような形状という二点から「伎楽面・舞楽面」もその組上に載せる必要があると思われる、以下に当館に伝わる八点の写真を紹介する。

(次号につづく)

- 1 このコレクションの先行研究として、越前俊也「日本の近代彫刻と写真―中原悌二郎を中心として」『紀要』北海道立近代美術館／北海道立旭川美術館／北海道立函館美術館／北海道立三岸好太郎美術館、一九九二年、一〇三―一一〇頁参照。
- 2 中村棼「中原悌二郎君を憶ふ」『芸術の無限感』中央公論美術出版、昭和五二年、六五頁参照。
- 3 同書、六六頁参照。
- 4 同書、六六―六七頁参照。
- 5 明治四二年七月一六日の日記、中原悌二郎『彫刻の生命』中央公論美術出版、昭和五三年、一一〇頁参照。
- 6 「ロダンの展覧会を見て」同書、一一頁参照。
- 7 「彫刻家になつた動機及びその態度」同書、二〇頁参照。
- 8 同書、一九頁参照。
- 9 越前、前掲書、一〇八頁参照。
- 10 中原信『中原悌二郎の想出』日動出版部、昭和五六年、一三〇―一三一頁参照。
- 11 千田敬一「大陸の魂―《若きカフカス人》」、青木茂／酒井忠康監修『日本の近代美術11 近代の彫刻』大月書店、一九九四年、九八頁参照。
- 12 中村、前掲書、八二頁参照。
- 13 平櫛田中「中原君に就いて僕の知つて居る事」、中原信編『彫刻の生命』アルス、大正一〇年、二六七頁参照。



③ 《瞑想》  
35×26cm  
裏面に輸入元の白鳳社の押印と  
「Rodin 42099」の鉛筆書



② 《ジャン=ポール・ローランス像》  
36.8×26.7cm  
裏面に輸入元の白鳳社の押印と  
「42053」の鉛筆書



① 《ピエール・ド・ヴィッサン (カレールの市民部分)》  
35.5×25.5cm  
裏面に輸入元の白鳳社の押印と  
「42017B」の鉛筆書



⑥ 《歩く人》  
36.8×26.1cm  
裏面に輸入元の白鳳社の押印と  
「Rodin 42133」の鉛筆書



⑤ 《ラ・フランス習作》  
35.2×26.1cm  
裏面に輸入元の白鳳社の押印と  
「42130B」の鉛筆書



④ 不詳  
27.2×35.8cm  
裏面に輸入元の白鳳社の押印と  
「Rodin 42124」の鉛筆書



⑦ 《洗礼者聖ヨハネ》  
36.1×25cm  
裏面に輸入元の白鳳社の押印と  
「Rodin St Jean」の鉛筆書



⑧の裏面



⑧書籍の切り抜き  
29.8×21.1cm



⑨の裏面



⑨書籍の切り抜き  
29.5×19.6cm



⑩の裏面



⑩書籍の切り抜き  
27.2×18.9cm



③《力士》 40.8×27.9cm



②《呉公》 38.5×29.5cm  
木彫着色伎楽面（伝毘沙門天面）法隆寺の印字あり



①《呉公》 39.4×30cm  
木彫着色伎楽面（伝毘沙門天面）法隆寺の印字あり



⑥不詳 34.8×24.3cm



⑤不詳 34×26.8cm



④《崑崙》 41×27.5cm  
舞楽面崑崙八仙（手向山神社）の印字あり



⑧《呉女》 19.6×15.1cm



⑦《呉女》 35×23.2cm